

月報 シオン山

2024年1月7日発行 (No400)

日本バプテストシオン山教会

☎803-0846 北九州市小倉北区下到津2-15-21

Tel(093)561-0772 Fax(093)561-0760 E-mail:bapshion@eagle.ocn.ne.jp

【月間聖句】

わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、
霊の導きに従ってまた前進しましょう。

ガラテヤの信徒への手紙5章25節

信仰の原点に立ち返る

田中秀一

2024年こそは、希望に満ちあふれた年になるという願いを、誰しもが抱いて新年を迎えたことと思います。しかしながら元旦早々に私たちが耳にし目にしたのは、余りにも痛ましい災害の報道と、その災害に起因する羽田空港での航空機事故でした。被災された方々、特に愛する家族を失われたご遺族の方々に、主が共に居てください御慰めと癒やしを与えてくださいますようにとお祈り申し上げます。

(2024年1月3日)

バプテスマ証 名前 田中秀一 当教会は、キリストのご命令により、あなたの信仰告白に基づいて、父と子と精霊のみ名によるバプテスマを授け、当教会の会員として受け入れたことを証明します。

1992年10月25日 シオン山バプテスト教会。

34歳、結婚して4年目の受洗でした。

結婚当時の私は、態度の悪い生徒の指導に閉口しながら、早くこの場所から逃げ出したいと、毎日不満を口にしながら過ごしていた未熟者の教師でありました。

その頃、私は妻に付き合っって時々礼拝に出席していました。しかし気付くと、自分が求めてもいないのに、いつの間にか「求道者」という立場になっているのを知りました。信仰の決心を求める「招き」が行われると、チラチラと私の顔を見る方が何人もいて、胸がキュ〜と締め上げられるような思いを感じたものです。教会員の先輩方は「お入んなさいよ、早くお入んなさい」「田中君、そろそろバプテスマを受けたらどうだね」などと毎回言われるのが苦痛となり、とうとう教会に足が向かなくなってしまうました。

私がバプテスマを受けることができたのは、妻の祈りのお陰でもあります。真夜中に目を覚ますと、傍らで私に向かって祈っている姿を何度か見た記憶があります。私はただただ、祈る妻に気付かれないように眠ったふりをしていましたが…。

妻は、西南女学院の宗教主事室（現在のキリスト教センター事務室）に勤めており、彼女は短大が招いた加藤常昭牧師や清水汎（ひろむ）教授という、正しく超一流の先生方が講演した記録用のカセットテープをこっそりと貸してくれました。私の気持ちが再び教会へ向かうようにという願いが、妻にはあったからでしょう。それを私は片道1時間かかる通勤の車中で何度も聴き返し、驚きとともに深い感銘を受けたのを今でもはっきりと覚えています。そして、キリスト教の世界とは…クリスチャンとしての人生とは…という新鮮な興味が膨らんでいったのです。

そのような状況下で、指導していた吹奏楽部の二人の生徒との出来事が、私の信仰への扉を開くことになりました。一人は高3の男の子で、彼は下半身が成長できない難病を背負い、背骨が湾曲して松葉杖を使う生活を送っていました。彼の母親は物事をやり遂げる力と、達成する喜びを彼に与えてやりたいという一心で入部させたのでした。

ある日彼は、清掃直後の水に濡れている廊下で滑ってしまい、大腿骨を骨折しました。骨が脆くなっていたのです。そのような事故が在学中に2回あって、九大病院に入院した彼を見舞ったとき、私はその姿に言葉を失いました。骨折で片足を固定しているだけでなく、骨盤と頭蓋骨に穴を開けて、湾曲した背骨を伸ばして矯正する4本のパイプが、彼の上半身に固定されていました。彼の頭に添えられたガーゼには血が滲んでいました。そして私の顔を見て、うっすらと涙を浮かべて「つらい」と言ったのです。私は「頑張れよ」と一言声をかけるのが精一杯の教師でした。

もう一人は当時高2の女の子です。彼女は中学時代に両親を失い、弟と二人母親方の祖母と暮らしていました。学業も熱心に行い、部活

のハードな練習も一日も休むことない立派な生徒でした。いつも笑顔を絶やすことのなかったその生徒が、ある時に私の仕事場であった音楽準備室にやってきて、ポロポロと涙をこぼすのです。事情を聞いてみると、自分たち姉弟の面倒をみていた祖母が、病気で入院して彼女が家事一切を行いながら通学していたことを知りました。クラリネットのパートリーダーであった彼女は、朝の6時過ぎには早朝練習にやってきて、後輩を指導しながら練習を行っていましたが、その前に弟と自分の弁当を5時には起きて作る毎日を送っていたのです。私に何か手助けを求めて来たのではありませんでした。ただ、彼女の辛さを私に聞いて欲しかったのです。

教師という職業を通して痛感したことです。自己体験に基づかない内容の生徒指導は、どこか確証の持てない浅薄な言葉に終始するということです。

その時も、かけた言葉は「しっかりな、頑張れよ」しか見つからなかったのです。つくづく私という教師はなんと情けないのだろうか…とっていると、本棚にあったギデオンの赤い聖書が目に入ったのです。東海大学は創立者の松前重義が内村鑑三に傾倒していたこともあり、ギデオン協会から聖書を頂く高校でした。吹奏楽部の生徒たちは、部活の終わりにはピアノの周りに集まり、四声体和声の訓練として讃美歌を歌うのが常で、時より私が新約聖書の例え話なども生徒に話すことがありましたので、彼らがキリスト教に触れる機会は少しばかりあったのです。

彼女に言いました。「先生はクリスチャンじゃないけど、教会では誰でもお祈りができるんだ。だからお前のために今からお祈りするからね。」とって頭に手を置いて祈りました。すると祈り終わって生徒の顔を見たとき、ホッとしたような、安堵した表情を浮かべていたのです。彼女のそのときの笑顔は、私を救うものでもありました。祈りとは救いであることを知りました。

この出来事を通して、自分が教師として子どもたちの前に立つためには、正しく信仰が必要であるということを実感したのです。その数日後、今村幸文牧師を訪ねて信仰の決心を告げました。

キリスト教に縁のない家庭に育った私は、このようにして家族と生徒たちによって信仰が与えられたのです。その背後に、当時のシオン山教会の皆様による祈りを憶え有り難く存じます。

この度、年の初めに巻頭言を書かせて頂く機会を頂くことで、信仰を決心した当時の想いを蘇らせることができたことを感謝申し上げます。

教会に繋がる皆様、お一人おひとりのご健康が守られますように、主にある平安と御顧みとが豊かにございますようにとお祈り申し上げます。